

環境非営利団体による「北海道の環境報告書」の出版に関する考察、およびその環境教育の可能性
- 「もうひとつの北海道環境白書」の制作を事例として -

北海道大学大学院 環境科学院
環境起学専攻 実践環境科学コース
福岳 渉

北海道大学大学院環境科学院と環境中間支援会議・北海道（非営利団体）は 2011 年に連携協定を結んだ。連携後、両者は初めての協働事業として「もうひとつの北海道環境白書 2012（以下、白書）」を制作した。本書は Rio+20（持続可能な開発に関する国連会議）を契機とし、北海道の環境（ごみ、エネルギー、市民活動、野生動物など）に長らく携わってきた 12 名それぞれの視点からその変化を記した報告書である。

本研究では筆者自身が白書の制作に加わり、会議やメール等による各人の発言を記録することで、この事業の成り立ちと変遷を纏めた。さらに、白書制作スタッフへその制作過程や出版後の活用方法に関する意見の聞き取りを行った。これらより、本事業を事例とした非営利団体による報告書の制作プロセスとその出版にはそれぞれどんな意義があるのかを考察した。

白書は「北海道の環境」をテーマに非営利団体独自の切り口で情報を発信し、主に 20 歳前後の人々の環境に対する興味関心を広げんとして作られた。しかし販売できる水準の報告書を制作するためには、相応の資金と人材が要る。そこで、非営利団体は獲得していた助成金を資金に充てられるよう助成先と相談し、大学の教員や学生（筆者）と協働することでこの課題を克服した。後者は、非営利団体と共に学生を教育できる仕組みを作っていきたいという、大学側の考えもあって実現したものである。このような制作の舵取りを、非営利団体、大学それぞれの組織のトップが担う一方、調査現場に当たる方々はそれぞれの使命感をもって作業にとりかかり、記事の執筆や白書の広報活動に尽力していた。完成した白書を今後どのように活用していくか、具体的な計画を打ち出すことが今後の課題といえる。

次に、白書の対象である大学生に“白書を読むアルバイト”の募集をした。環境に関する特別な勉強やボランティアをしたことがない学生に本書を読んでもらえる点がこの手法の特徴である。募集した学生 42 名を 1 組 6 人前後のグループに分け、計 7 回にわたるグループインタビューを行った。そこでは、白書の中で興味を持った記事について考えさせ、そこからどのような気づき・学びがあり、意識の変化が生まれたのかを聞いた。このほか、本書の構成や内容の完成度、さらに環境教育の教材として使う水準に達しているかどうかの評価をしてもらった。

結果、読者の持つ思想や経験に近い記述は評価を得やすかった。このとき読者は、白書により自らの意識を変えろというよりも、自身の考えの正当性を再認識し見識を深める。一方、読者が持ち得ない知識や思想が書かれていることに気づき、その意外性を評価するケースもあった。このとき読者には、本書をきっかけに新たなことに取り組もうとする意識の変化が見られた。また、白書は一般の学術書よりも読みやすく、環境に興味のない人・高校生にも興味を持ってもらえる、という回答が過半数を超え、本書は若年層に向けた環境教育の教材となりうる示唆を得た。